



成人向け

豪
中
天
こちゅうてん

【壺中天（こちゅうてん）】とは古人のいわく…「壺の中はまさに天にいるかの如き心地よいさま」（壺の中は別世界・仙界（仙人の住む所、俗世を離れた清浄なる世界）に繋がつており、そこで酒を飲み世を忘れる楽しみを知る事」「確認の取れぬか確かな事柄に対する希望・恐怖・怒り・喜びを見出すための悟りの境地」などという意味を表した、ルーフェン地方に古くから伝わる有名な法術伝である。

その言葉の意味する内容は実に深く、端的な事象への伝奇でありながら…その言葉の中に存在する意味を巡り、様々な法術家や武術家、歴史学者らの間で意見の相違や様々な解釈の違いが長きに渡り論じられてきた。だが、その言葉の示す深奥の暗号に付いて、本当の意味で本質に辿り着いた者は武術界の最高峰『拳仙』の称号を持つ男「レイ・タン・ドラ老師」をおいて他にはいないであろう。これは壺中天の真髓…『居合』と『異愛』の極意をその身に宿した少女の物語である。

春光拳・総師範…レイ・タンドラである。それに相対するように座するは、若くたおやかな黒髪の女性…ミカヤ・シェベル。彼女のバストはバリアジャケットの胸元を押し開くほどに豊満である。

これより、ここ春光拳道場・青龍の間において…壮絶な戦いが始まろうとしていた。

ちゅどーんツツ…！

「ハア、ハア…さあ、老師。次の一撃が、私がこの地で学んだ全てをかけた最後の技になります。どうか、お覺悟をツ…イヤーツ！」

「ホホウ、では見せてもらおうかのう…新しいミカヤ嬢ちゃんの剣激とやらを。その返礼に、ワシも久しぶりにスかせてもらおうかの。ワシの持つ『剣』を…フンツ…ズバンツ」

「ハアアアツツ…！ イヤアアアーツ…！」

「天瞳流抜刀術奥義・勃起剣『龍絶魂』

「春光拳抜刀術奥義・勃起剣『龍絶魂』

ガキイイイイン…ツツ

ズガガガガア…ンツツ…！」

なんという事か…この日、ミカヤは数多くの技をレイ老師に対し繰り出してきた。その中でもこの技は…ミカヤがこの三日間の滞在で読破した秘伝書から考案した、名は無い

までも今の自分が持てる渾身の一撃であった。

だが…その劍激はものの見事に鋼鉄のナニに弾かれ、ミカヤは道場の壁にめり込む形で、その力の全てが己に帰つてきていたのだ。

それにしても…私の目の前にそそり立つ、老師の下半身から露出している『モノ』がいつたい何なのか…その時の私にはとうてい理解できるものではなかつた。

それは、剣というにはあまりにも太く…男根というにはあまりにも大きすぎた。

太く…重く…猛々しい。

それは、まさに『鉄塊』であつた。

これぞ、春光拳『鉄股功（てつこう）』

自身の陰茎を駆使して岩を削り、薄皮を重ねるようくクンマーを積んでいき…筆舌にしがたい修練に耐え切つた者のみが、この強靭な鉄の股間を手に入れる事ができるのだ。

「ホホホッ残念じやが、そのミカヤ嬢ちゃんの技には決定的に何かが欠けておるのぉ…」

最初は他流派としての交流戦が目的だったとはいって、レイ老師が相手とあつて『嵐鎧』まで装備した真剣勝負。故に、ミカヤも全力を出したこの手合せであつたのだが…その実力の差はいかんともしがたく、勝負の行方はミカヤの破損した衣服が物語つっていた。

「そもそも居合道など全ての『道』の原型ともいわれておる古代武術において、『居合』は『異愛』とも書く。剣と鞘、男と女、男根と膣、これら異なる物がそれぞれを愛し・・受け入れ合う事こそが居合いの根源なのじや。ミカヤ嬢ちゃんはよく出来とるが・・やはり『コレ』を知らぬ今のお主では、居合を極める事はかなわぬのう。それに、これは真剣勝負・・さらには男女の闘いで敗北した者、特に女子がどうなるかは存じておろうな?」

「くう・・ッ、は、はい。では老師、不束者ですが・・どうかよろしくお願ひいたします」

身を正しレイの前に向き直ったミカヤは、床に三つ指を付き深々と頭を下げた。

「うむ・・二岩窟での修練を終えた今のお主に居合いを愛する心があるのであれば・・約束どおり春光武林の『武』『道』『刀』をもつて、ワシが居合いの極意をその身に刻み込んでやろうかのうでは、ゆくぞおおツツ!」

『奥義・ドラゴンインストール(龍魂挿入)』

これぞ、春光拳に伝わる幻の性技・・日々の鍛錬で少しづつ蓄積されてきた性欲を一気に解放し、鍛え上げられた男根に注ぎ込む必殺技である。これが妙齡の達人ともなれば、その性欲はゆうに数十年分はあるであらうか?

(こ、これは・・老師の中から力が溢れ出て・・下半身の股からまたあの『剣』がツ!?)

読者の方々は、もうお気づきであろうか? とは・・まさに大遊山じやのおくホホホツ♪

もう一つの称号があつた・・その名も『拳性』印したその性欲を・・今宵、ついに解放する。「さてさて、それではまずこの大きな乳を使つて、異愛の伝授を始めようとするかのう?」

(ゴクツ、近くでよく見ると更にスゴい・・)

「し、しかし、私はその・・まだ心の準備が・・キヤアアアツ、はあつ、ああ、アアンツ」

なんという事か・・とても高齢の老人とは思えぬ力強さで、老師はミカヤの胸元の服を開くと・・巨大な男根を胸に押し付けた。

先程の一撃により、その豊満なバストを覆う白きサラシは弾け飛び・・最後に残った乳バンドを押し上げつゝも顎わになつた乳首が、ミカヤの熱い吐息と連動するように上下する。

「ほほほおう・・これはなかなか綺麗な身体をしておる。さらにワシ好みのよい乳じや♪」

レイ老師はなぶるようミカヤの胸をもみしだきながら、亀頭の先端より溢れいでの粘性の高い先走り汁を胸の谷間へと擦りつける。

(こ、これは・・老師の中から力が溢れ出て・・下半身の股からまたあの『剣』がツ!?)

読者の方々は、もうお気づきであろうか? とは・・まさに大遊山じやのおくホホホツ♪

もう一つの称号があつた・・その名も『拳性』印したその性欲を・・今宵、ついに解放する。「ああ、こ、これはとても、恥ずかしい・・」

「ホホ、まずは胸元の鞘で剣を收めるのじや」「あつ、はあ、はい・・ああ、ふう・・あん。たぶんつ、たぶ・・ああ、いかがですか老師? にゅぷツ・・はあ、私の持つ鞘の心地は?」

ぐりゅん、ぐりゅん、ぐりゅん・・

「ほほう・・この重み、こんないやらしい乳でこの年寄りを誘おうとは・・ほれ、その胸に包み込んだ剣の切つ先を、次はお主の新たな鞘に収めるのじや・・さあ、口を開くがよいぞ」

「はい・・あつんつ、ちゅぱつ、ちゅツ・・ツ」「ほれつ、ほれつ、ほれつ!」

「ああ・・あツああ、ふう・・はあむ、んつ・・」「んつ、うんんくふはあ、じゆる、じゆる、じゆる・・ん、ん、ん、んんむう、ニュプ、ニュプ・・んぐつ、ああ、ハア、はむツ、ああ」

「そうじや、よいぞミカヤ嬢ちゃんや。もつと舌先でツルギの切つ先を舐め回しながら刃の形を把握するのじや。ほれぼれほれツ、こ

「ほほおう・・こりやす・・い乳圧じや。とても男を知らぬ乙女とは思えぬ器量だのう。この歳でこの大きな一つのお山を眺められようとは・・まさに大遊山じやのおくホホホツ♪」

「ああ、こ、これはとても、恥ずかしい・・」

「ホホ、まずは胸元の鞘で剣を收めるのじや」「あつ、はあ、はい・・ああ、ふう・・あん。たぶんつ、たぶ・・ああ、いかがですか老師? にゅぷツ・・はあ、私の持つ鞘の心地は?」

ぐりゅん、ぐりゅん、ぐりゅん・・

「ほほう・・この重み、こんないやらしい乳でこの年寄りを誘おうとは・・ほれ、その胸に包み込んだ剣の切つ先を、次はお主の新たな鞘に収めるのじや・・さあ、口を開くがよいぞ」

「はい・・あつんつ、ちゅぱつ、ちゅツ・・ツ」「ほれつ、ほれつ、ほれつ!」

「ああ・・あツああ、ふう・・はあむ、んつ・・」「んつ、うんんくふはあ、じゆる、じゆる、じゆる・・ん、ん、ん、んんむう、ニュプ、ニュプ・・んぐつ、ああ、ハア、はむツ、ああ」

「そうじや、よいぞミカヤ嬢ちゃんや。もつと舌先でツルギの切つ先を舐め回しながら刃の形を把握するのじや。ほれぼれほれツ、こ

おおくこの絡みつく柔らかさ、何年ぶりかの」「ああ、つん、んんツ、ああん、はつ、はあ



始めはその羞恥的な行為に恥じらいを隠せずいたミカヤであったが…その態度は次第に軟化・より淫らになっていく。

その理由には、ミカヤを見つめる『開かれたレイ老師の瞳』にあつた。

春の光に誘われる獣が如く、心淫れ求める。

春光拳・秘伝奥義『桃色視線』

これは動物の持つ『発情期』を極めし獸拳の一つ。鍛え上げられた眼力によつて、その瞳を目にした相手の身体に発情期を誘発させ、その体を淫らにさせる恐ろしい必殺拳である。

しかし、自尊心が高いとはいえた頃の乙女。

これ以上の辱めに耐えるのも、もはや限界といえるであろう。レイ老師はあらわになつた乳房を撫で回しつつ後ろに回りこむと、緋袴の構造的弱点である大きく開いた腰よこの『合わせ目』より手を滑り込ませ、ミカヤの蒼穹へと手を入れてはなりません…ああ

「くつ、んんっ、ああ…る、老師…そのような所から手を入れてはなりません…ああ」不意の攻撃にミカヤの表情が激しく動搖し崩れる。まだこの行為に慣れていないのか？それとも、先程まで張り詰めていた緊張が下半身への不意打ちにより途切れたのか？ミカヤは快楽に耐え忍ぶ顔を隠せなくなつていた。

レイ老師は更に強く乳房を掴み、指先で乳首をこねくり回しながら…布擦れの音がするほどに激しくミカヤの股をまさぐり始めた

「おや？ ミカヤ嬢ちゃんは下着を着けてはおらぬのかのおくんううどれどれえ？」

「は、はい…戦いに赴く礼装には…あんつ、下着は身に着けないように…んんつ、アア」

堪らず声を漏らすミカヤの切なげな声に耳を傾けながら、レイは次第に潤いを増していく指先の感覚へと意識を集中させていく。

「くうつ…んつ、ああ、る、老師…ああツ」

ミカヤは脚をよじりながら、せめてもの抵抗をみせるのだが、そのような抵抗などレイ老師にとっては障子戸に過ぎない。いや、むしろその仕草は、枯れた老人の性欲をエレクトロさせるには十分すぎる効果があつたようだ。

『合わせ目』より手を滑り込ませ、ミカヤの手を食い込ませれば跳ね返る弾力をもつた若々しいミカヤの乳房。肌は十代の持つ絹のようなきめ細やかさと纖細さで掌に張り付いてくる。これは…もはや我慢の限界である。

「すまんが、前戯はロマンキヤンセルじや」激しく昂ぶったレイ老師は、前戯によつて火照ったミカヤの体を優しく床へと押し倒す。

「さあうて、それではいよいよ本番といふかのおく覚悟はよいかミカヤ嬢ちゃんや？」

「は、はい…覚悟は出来ております。ンツ」

期待と不安が入り混じりながらも、ミカヤの凜とした瞳に、レイ老師は彼女に武人とし

て『サムライ』の覚悟を感じ取るのであつた。

最早、抗う力も持たぬミカヤの脚を持ち上げ…レイ老師は大きく彼女の股を開かせた。

捲りあがつた緋袴の奥では愛液が糸を引きながら溢れ、滴り零れ落ちた愛液が緋袴の上に大きなシミを作り上げていた。

この往年の想いを抑えることなく、レイ老師は何十年ぶりかの挿入に期待で膨れ上がつた剛棒もとい精剣に手を添えると、ミカヤの股間へとあてがつた。そして、熱く火照った

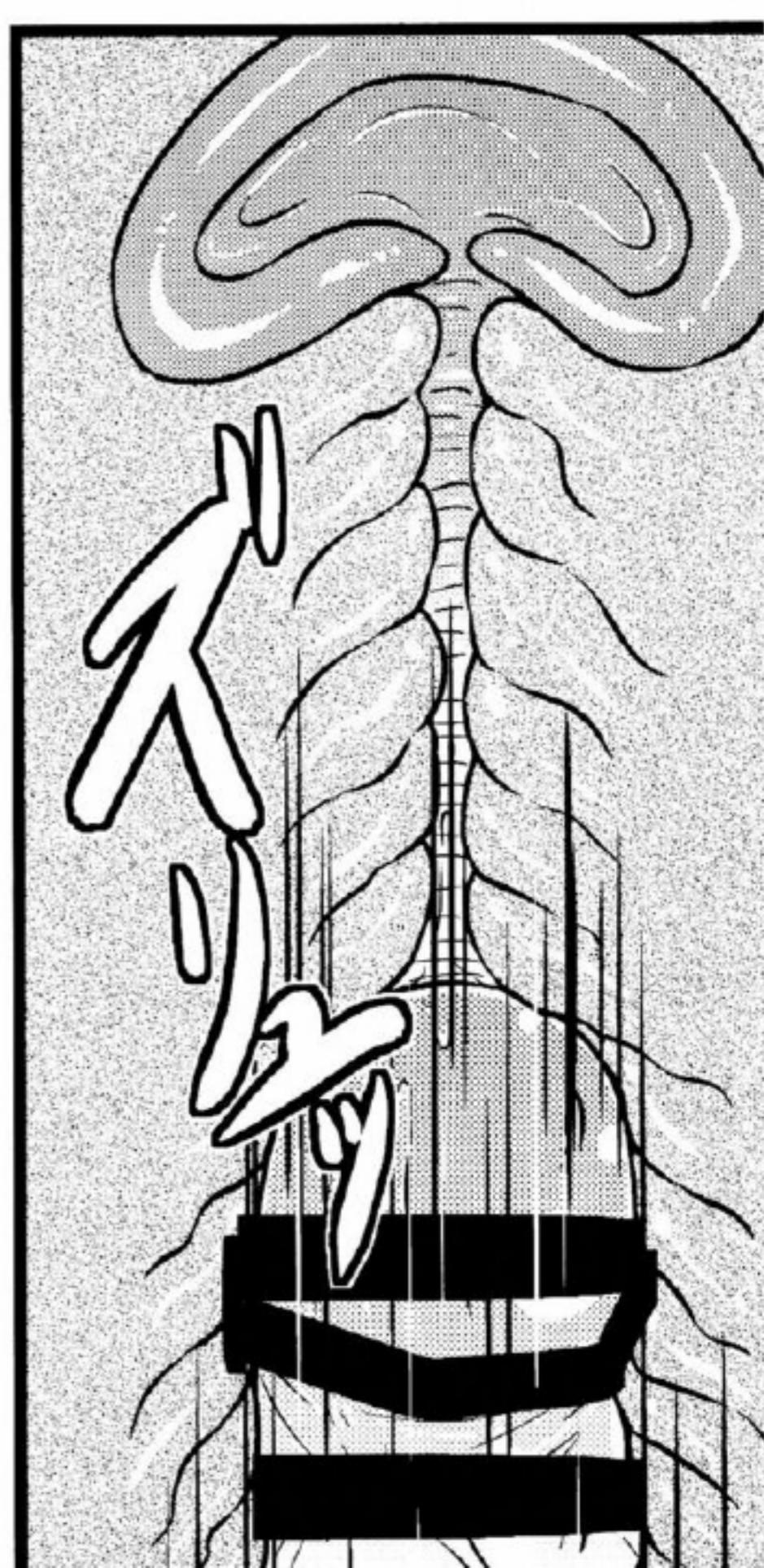
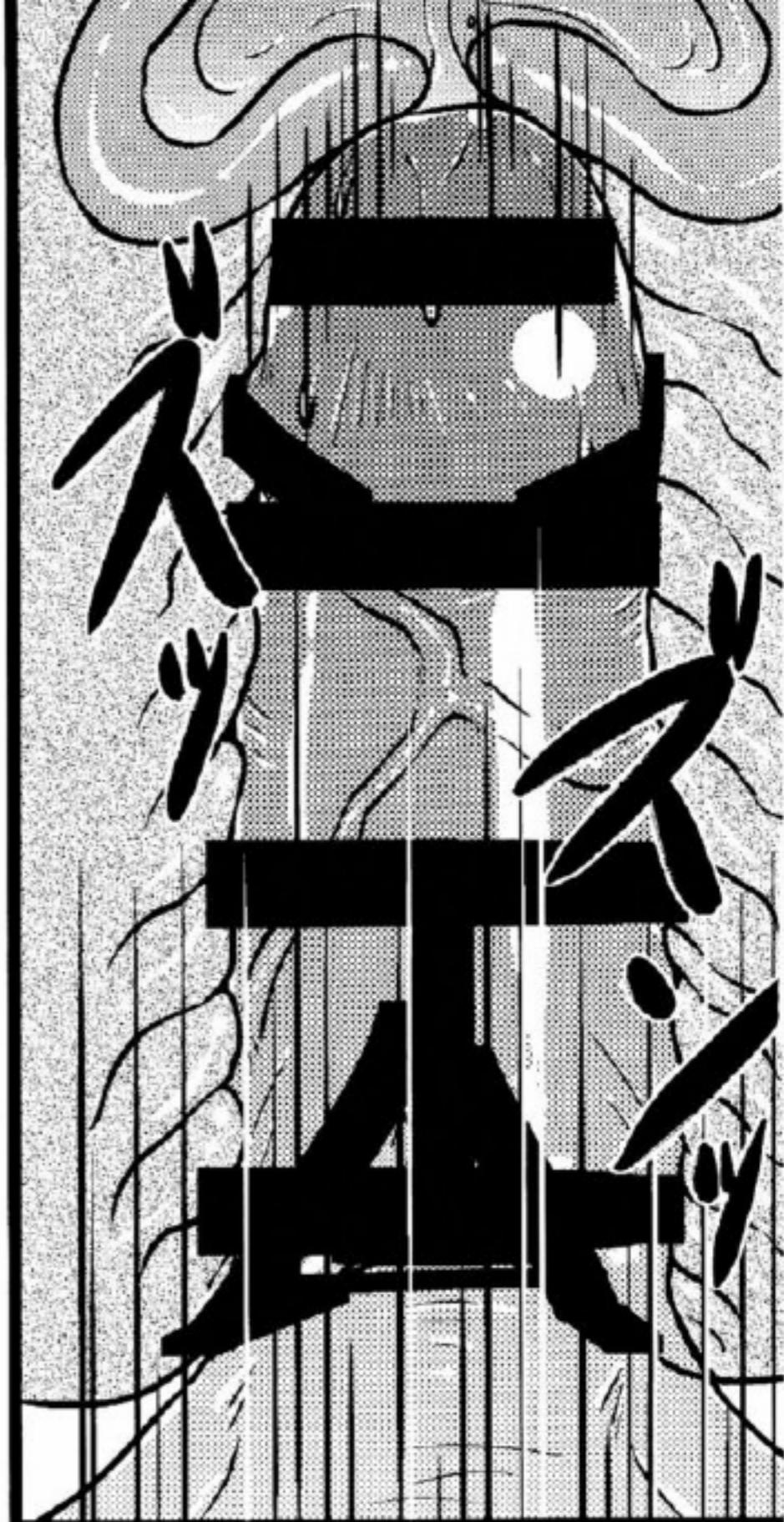
秘肉へと…その猛った劍を押し込んでいく。ブチッ…という僅かな抵抗の後、締め付け

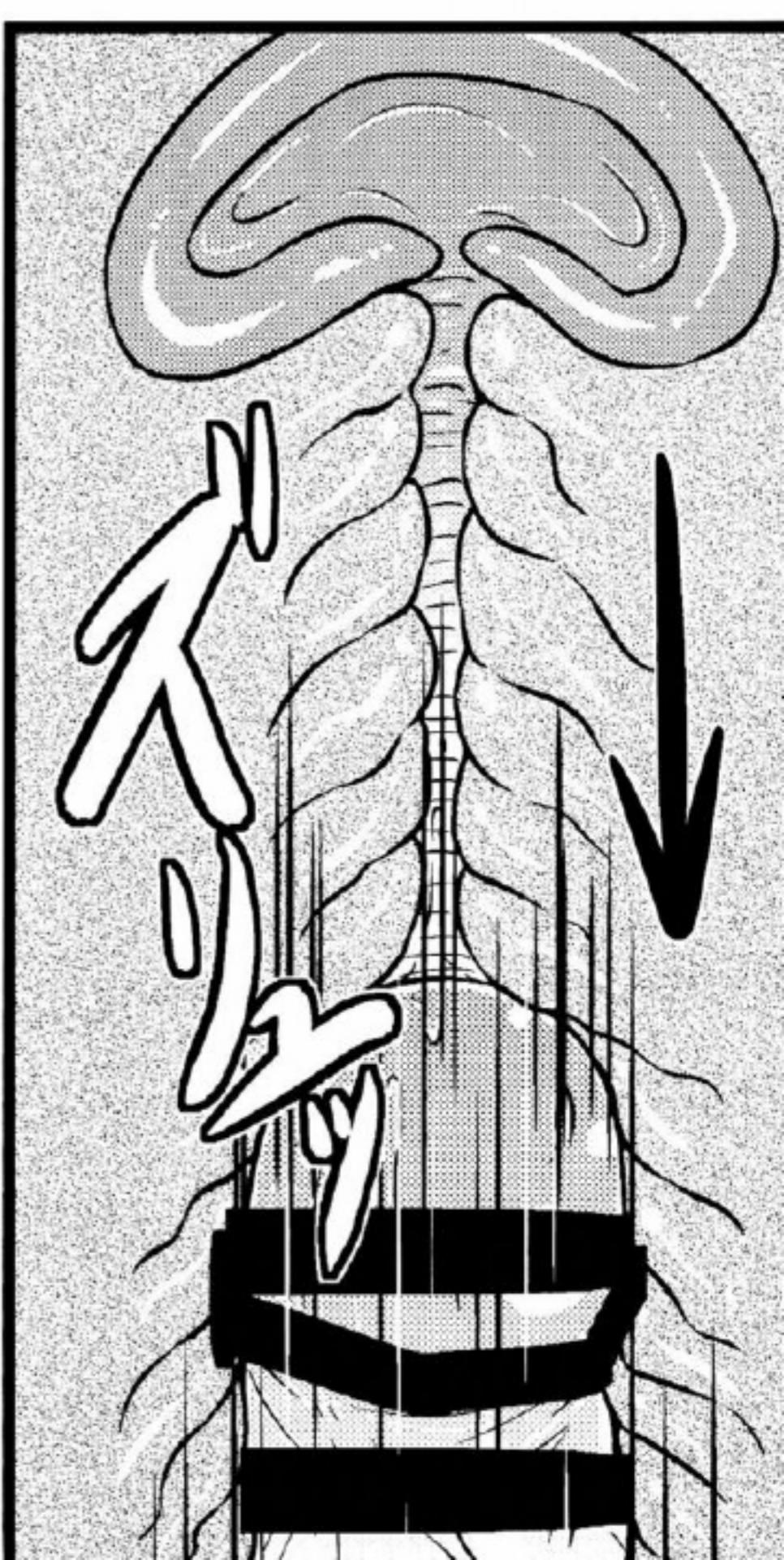
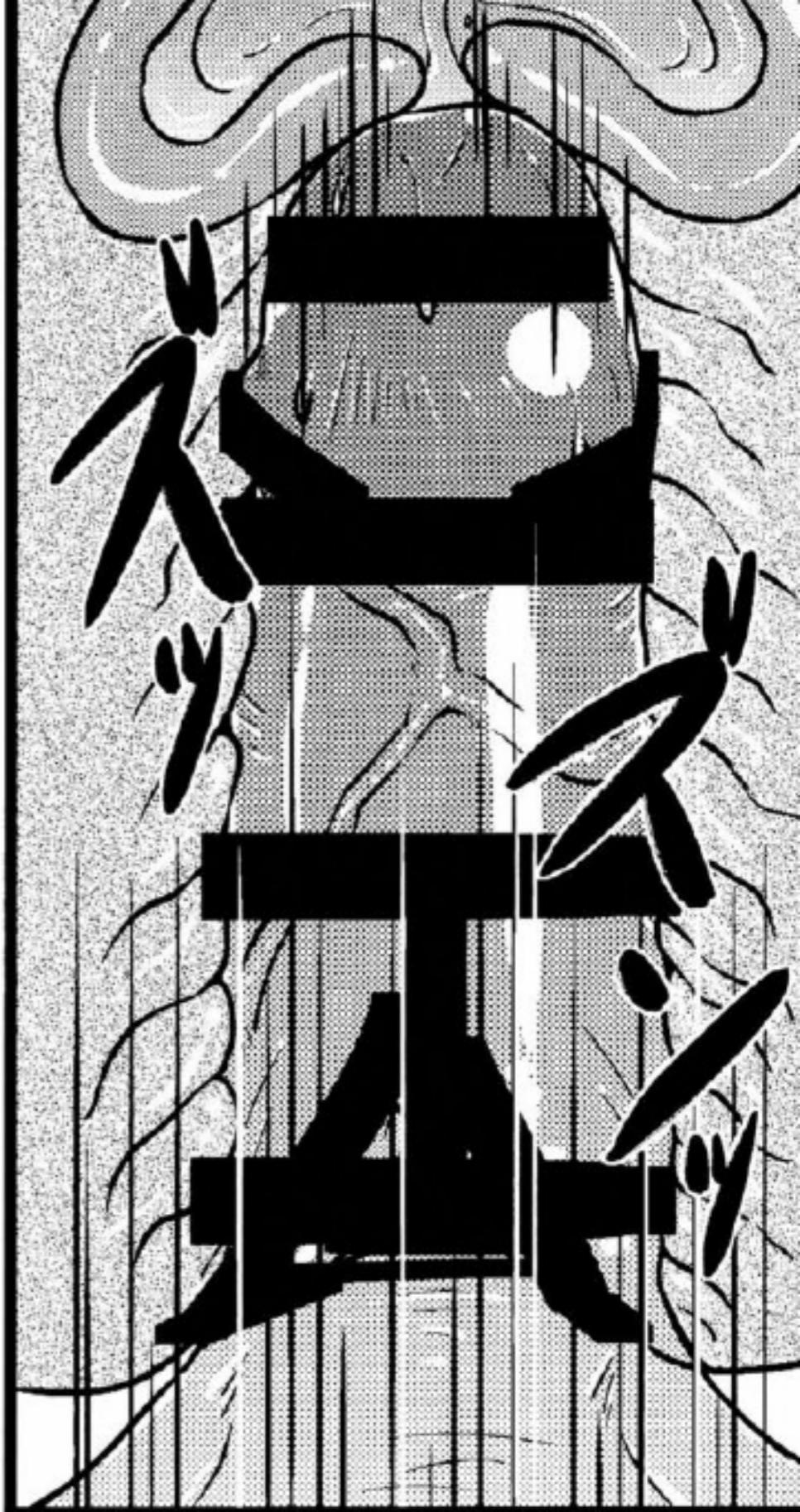
る肉襞を搔き分けながら…ワシの肉棒は乙女たるミカヤの奥深くへと入り込んでいった。

「んつ…痛ッ、んん…んああ、んふう…」方を迎える事がこんなにも痛いとは…

（う、うくうつ…い、痛い、痛いよお…殿屹立したたくましいその精剣が…処女膜のもたらす僅かな抵抗を感じつつも、徐々に進行し…深く、深く埋没されていく。

「ああ、はあ、あああん、あんつあんツツ」





噛み締めながらも声を漏らすミカヤは、ビクン、ビクンと背中をのけぞらせながらも…突き入れられた肉棒を必死に受け留める。

「はああつ、ああ…あああああくうう…」

一瞬の痛みの後、封印されてきた性欲を解放した老師の力強く熱き血潮を持ちて、突き進むであろうその侵入を…ミカヤはただただ受け入れるのみであつた。

ジュップ…今回が初物という事と、日々の鍛錬により鍛え上げられた内もとに覆われた肉壁は…レイ老師の剛直たるモノをキュウキュウときつく、きつく締め上げ続ける。(うううううう、これが話に聞く純潔を失った痛みなのか…んああッ、あッ、ああ…)

「さすがにきついようじやが、濡れ具合は悪くないのお…まさに『奥の細道』といつたところかのお…刀鍛冶が打ち終つた刀を最初に鞘へと收める時、その鞘口が傷つくのだと…」
「ふうむ、この反応に秘裂よりの鮮血…ミカヤ嬢ちゃんは本当に処女だったようじやな?」
「は、はい…私は今、貴方を收める鞘になりましたああ…ハアハア、どうぞ、このままで存分に、この鞘を解放してくださいませ…ひやああん、あん、あつ、んああ、あんッ」
「うおおつ、こりや良い絞まり具合じや、日々

の鍛錬の賜物じやな。キュウキュウ言いながらワシの剣を締めつけて離さんぞツツ!!」

「あつ、あんつ、ああつ、はあああああ

その豊満なバストを窮屈そうに拘束していった乳バンドを押し上げながら…ミカヤの大きなおっぱいが、熱い吐息と運動してプルン、プルン♪と激しく上下に暴れまわる。

老師は激しく暴れるおっぱいを手に取ると、

赤い果実のように色を染め上げた乳首の先端に舌を這わせる。ビンビンに突起した程良い硬さの乳頭を舌先で転がすように口に含むと

「うつくうつ…ああ、ひやああああつ!?

とミカヤの切なげな吐息が道場内を響き渡る。

(…ほほおく、さすがにミカヤ嬢ちゃんは処女というだけあつて恥覚過敏じやのおく。感

度はバツグンの様じや…大人びた仮面を取り除けば、やはり歳相応の乙女ということがのおく。これは最後まで楽しめそうじや…)

「ふうむ、この反応に秘裂よりの鮮血…ミカヤ嬢ちゃんは本当に処女だったようじやな?

今までにだれぞ想い人はおらんのかつたのかね?一人で情事に興じた事も無いと?」

「は、はい…文献で知識としては知つておりますが…剣術に関係の無い事柄に興じる

のは躊躇われたもので…他の同姓からの相

談や体験を聞くだけで満足しておりました」

これは、言葉攻めによる辱めによつて…

ミカヤの心に張り付いた最後の『鎧』を引き剥がすレイ老師の巧みな話術である。

己が拒み続けた事柄を受け入れなければ、

この伝承の儀式はただの獣じみた交配行動となんら意味を返さない。それをこの老人は身を持ってミカヤに伝えようとしているのだ。

レイ老師の言葉責めに、ミカヤはただただ羞恥による頬の赤らみを隠せずにいた。

「はあああ…あ、あ…ハアハア…」

腰を突き出しつつも搾るように乳房を揉み、

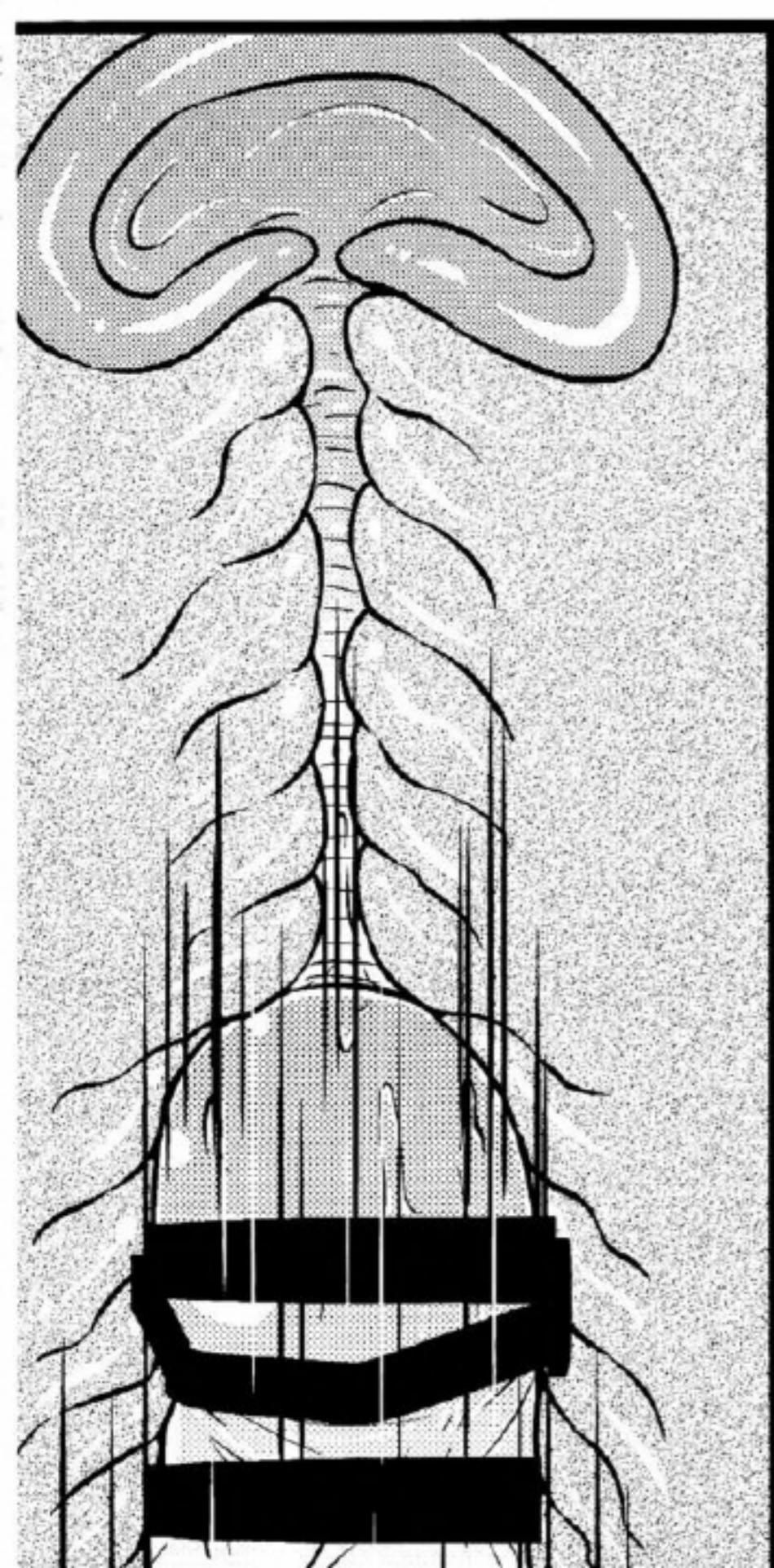
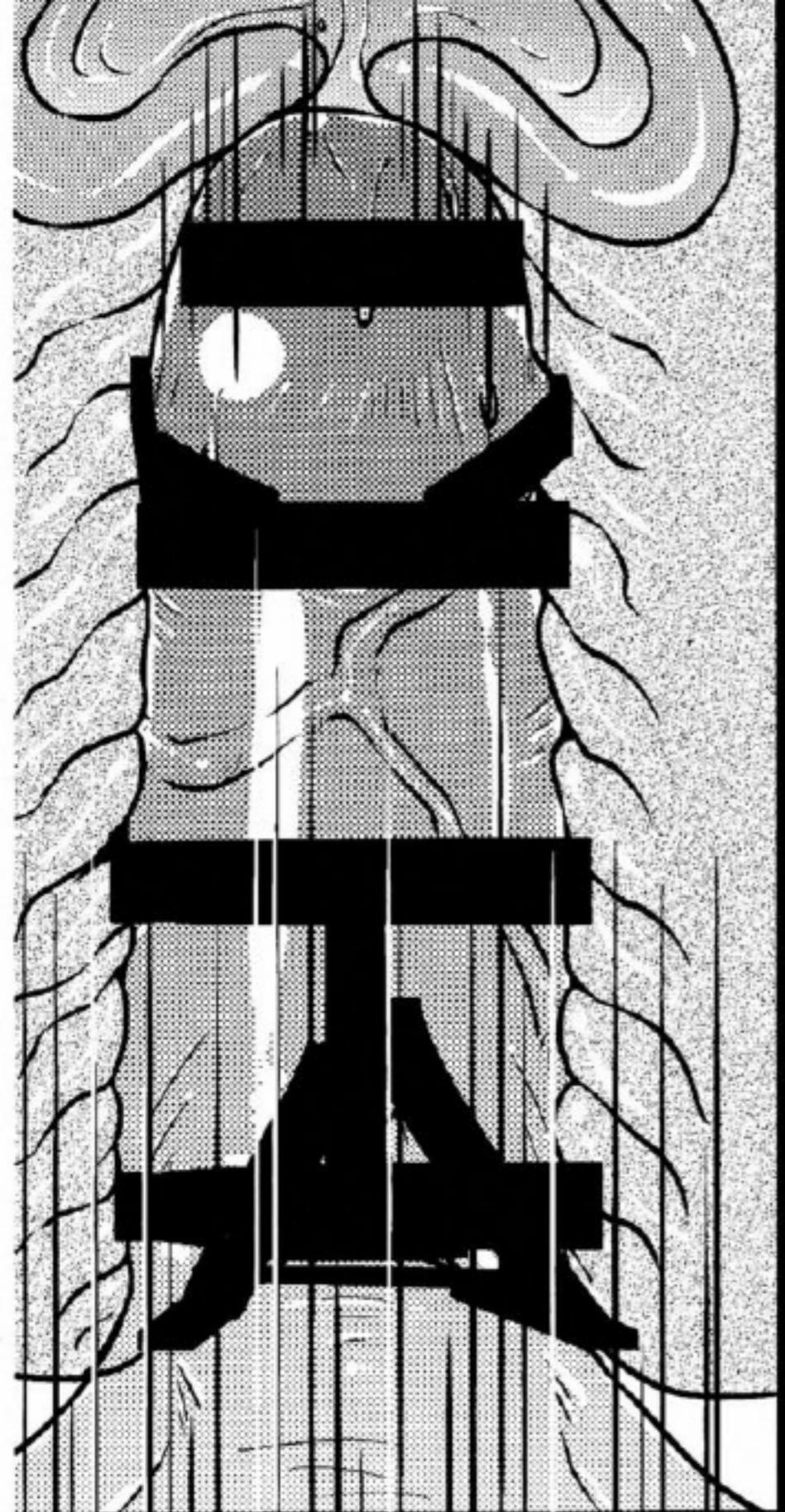
先端を前歯と舌で刺激していく。心と身体の痛みに耐えながらミカヤは必死に耐えていた。

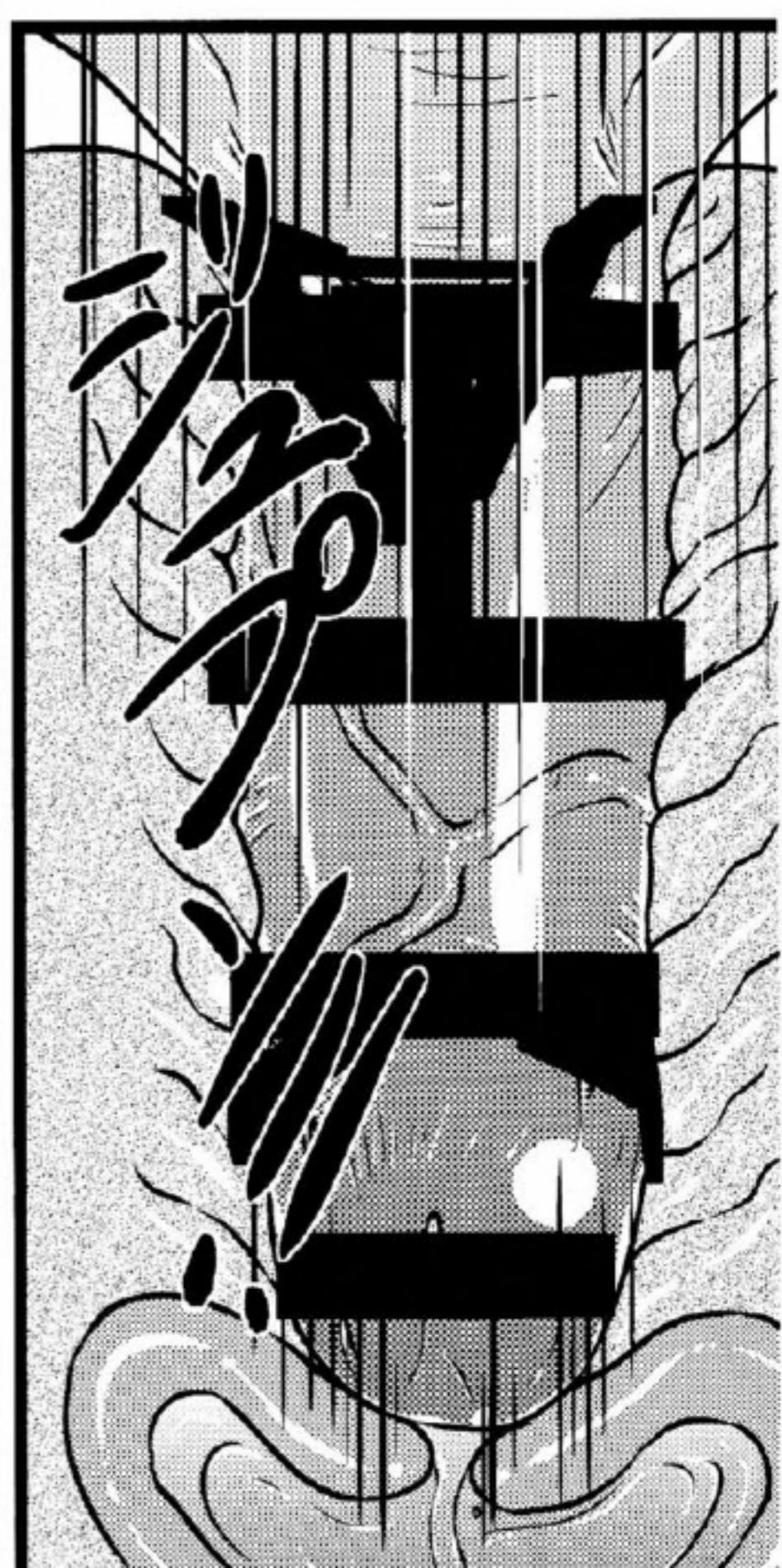
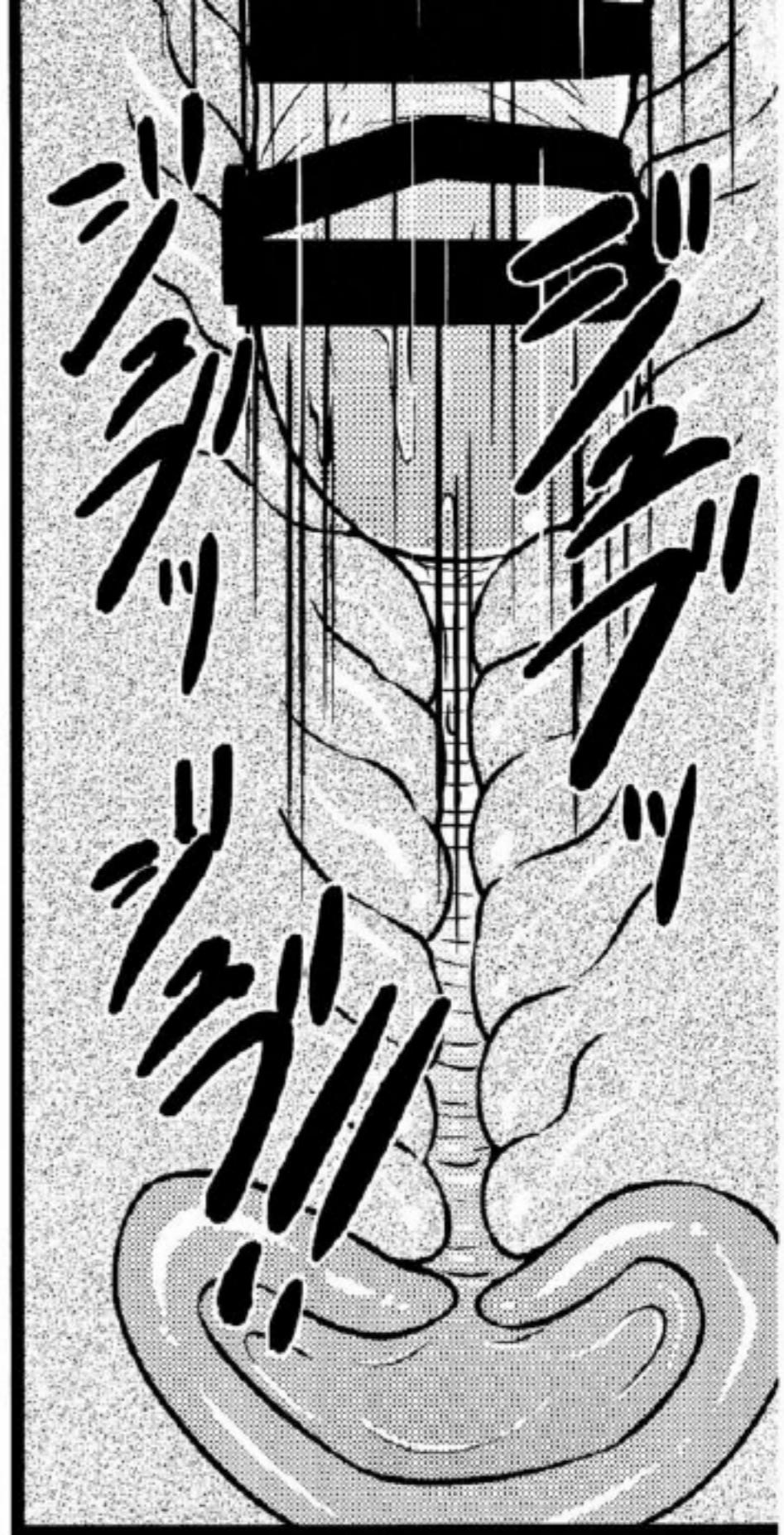
その姿…何となめかわしい事か。

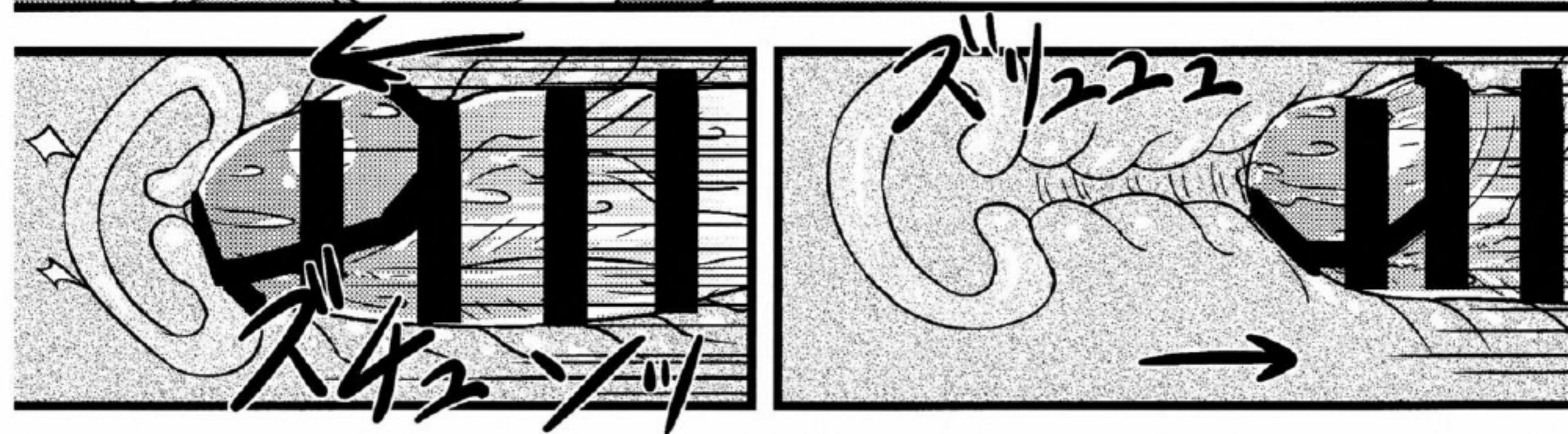
先程まで生娘であったおなごの動きとは思えぬ無自覚なまでの妖艶さでレイ老師の欲情をさらに昂ぶらせていく。

「んつ、あ…はあ…んんッああッ」
ズリュン、ズリュ、ズリュ、ズリュッ!!

挿入後もその弄ぶような執拗な愛撫をその身に施され、ミカヤの緊張も徐々にほぐれていた。その証拠に弱々しくも女性特有の上擦ったあえぎ声をその清らかな口より漏らし始めるのであつた。







股間をまさぐつていた指を剛直の突き刺さる濡れすぼつた割れ目へと押し込むと、そこはすでに蜜で溢れかえった蜜壺と化していた。すでに彼女は、淫靡な快楽の虜となつているのであろう。生殖という生物の根幹をなすネイチャーは実に多弁だ。彼女の心と身体が、今までに一つの目的に向けて動き出そうとしている。それはつまり心身同体の境地、これにより奥義伝承の準備は整つたといえる。

ミカヤの息が徐々に荒くなつていく。

たとえ・・清らかなる乙女と言えど、この時に見せる痴態は誰もが同じだ。それも、異国の姫武者という装いともなれば、その痴態への興奮もさらに高められようというものだ。

年甲斐も無くわきあがる欲望を抑える事も無く・・レイ老師は激しく前後に腰を振つた。

「あ、ああああ、あんつ！・・いやあああ」

ミカヤの声が甲高さを増していく。声が抑えられなくなるほどの快感に身を焦がしながら、ミカヤはぎゅっと袖口を掴み下半身から脳天へと突き抜けるような快感に耐えていた。

「じやが、鞘から刃が抜けなければ居合いにはならん。剣を離すまいとする鞘の力を使い、その刃をいかに早く肉壺から引き抜くか・・

股間をまさぐつていた指を剛直の突き刺さる濡れすぼつた割れ目へと押し込むと、そこはすでに蜜で溢れかえった蜜壺と化していた。すでに彼女は、淫靡な快楽の虜となつているのであろう。生殖という生物の根幹をなすネイチャーは実に多弁だ。彼女の心と身体が、今までに一つの目的に向けて動き出そうとしている。それはつまり心身同体の境地、これにより奥義伝承の準備は整つたといえる。

ミカヤの息が徐々に荒くなつていく。

たとえ・・清らかなる乙女と言えど、この時に見せる痴態は誰もが同じだ。それも、異国の姫武者という装いともなれば、その痴態への興奮もさらに高められようというものだ。

年甲斐も無くわきあがる欲望を抑える事も無く・・レイ老師は激しく前後に腰を振つた。

「あ、ああああ、あんつ！・・いやあああ」

ミカヤの声が甲高さを増していく。声が抑

それが重要なのじや。では、ゆくぞ。ハアツ」「そ、そんないきなりでは・・はあ、は、激しそぎます老師・・ああつ、ハアアアア、あんつ、あんつ、アンツツ！・・ふええ？・こんな格好でふああつ・・あんつ、ハアア・・ダメ・・」「ふんツふんツふんツ、ほれほれ、泣き言を言うにはまだ早すぎるぞミカヤ嬢ちゃんや」正常位からレイ老師に抱き上げられ、ミカヤは老師の上に跨るようにして腰掛ける。

これは四十八手の一『抱き地蔵』である。

ミカヤは深い挿入感に気を失うまいと、レイ老師の首に手を回し、本能的に顔を近づけると熱い吐息を吹きかける。

「ああ、あん、あんつはあ、あん、んんつ」互いに火照った唇を重ね合わせると、舌を絡ませながらミカヤも唇を吸い返す。興奮が頂点に達し、頭が真っ白になつていていた。

「ん、んふむう、ふう・・はああつ、あんつ」

パンパンパンパンパンツッ！

「はあんつあんつあああ、はあん、老師い、私もう・・腰が、腰がアアアああはあん、ハア」

「そうじや、膣が感じるがままに腰を浮かせず。離れた唇を愛しむように舌を伸ばし、舌先同士がかすかに触れ合う。その度に一人の唾液がねつとりと糸を引き、口の端より滴り落ちる。レイ老師は突き上げの反動を利用してワシの動きに合わせるのじや。脚を絡ませて深く結合するがよいぞおツ、ホレホレホレ」「あつあつあつあああはあくく、あつ！」ズリュユユユユユ・・ズチュンツ・・

「あ、あつ、はああ・・ひいツ、あつ、あ・・・ビクツビクツビクツ・・

ペニスで受けとめるようにして再び挿入する。ミカヤの体が折り曲がるほど強く、全体重を込めて腰を上から突き降ろす。道場の床がギシギシと等間隔で軋み声を上げ、しなやかなミカヤの肢体がレイ老師の体を受け止め沈み込んでいく。そして、片脚の太ももを抱えることで、さらに深い挿入感がミカヤの膣奥・・子宮口を強く刺激する。

この『突き上げた陰茎の反動を利用してから』の対面座位からの正常位、側位、そして後背位へ』という…この四十八手をもちいた、流れるような一連の動作による体位の連携技。

この実に曲芸めいた性交を得意とする、ある高名なAV男優を原作者は知る。

こちらの製作者サイドと連絡が取れ無かつたため、作品タイトルを含め名は伏せるが…自己の性欲を発狂寸前にまで追い込む荒行を条件に…この体位は実在する！！

「さあて、次は後ろから行くぞい。ミカヤよ…尻を突き出すのじや。ほおくれズブツ」（ああ、老師が私の事を『ミカヤ』とお呼びになつてくれたのか…？嬉しい…グスツ）

連續した挿入の感覚で薄れる意識の中、ミカヤはレイ老師の些細な一言に胸が熱くなり、その瞳に純情たる涙を潤わせるのであつた。「おうおう、大きくて柔らかい尻じやのおく。（どうやらミカヤは安産タイプじやな。これなら元気な後継者となる御子をたくさん産んでくれそうじやて…）フム、ホイツとおく」ペチン、ペチン、ペチン♪

「くああああ、はんつ…ああ、そのようにお尻を叩かれては…ハアハア、はあつ！！はあんツ…くううううつ、ああ、んんツ…」

「ホホ、このモチのような吸い付きたまらんのおく。手に引付くような柔らかさに加え、叩く度に締まる纏わり付きとは最高じやな」

「パンツパンツ、ずちゅずちゅ、ずちゅツ」「はあツ、ハアやだあ、あん、ああ、あんツ」ピストン、ピストン、ピストントン♪

「ほほつ、さすがじやなミカヤよ。ワシのこのリズムに合わせて腰がついてきよるのお」

（ああ、おちんちんつ…入つてくるううくんツあああ、ああああ…ビクン、ビクンツ）「ほれ、お次は『押し車』じや」

そう言うとレイ老師は、四つん這いになつているミカヤの後ろから両足を持ち上げ、ま

るで畑を耕すかのよう道場内をグルグルと練り歩き始めた。腕と挿入された男根のみで全体重を支えるミカヤは、男根が抜けないよう気を配りながらも…両手で体重を支えながら突き出されるペニスの突きに合わせて道場内を目的も無く前進していく。

それをしばらく繰り返し、道場内を練り歩いた頃。ようやく老師はミカヤの脚を床に下ろすと、純粋な後背位の体勢…四十八手『鷦越え』である。その体勢から激しく腰を動かし、修練中の乙女のマンコにチンコを強引に突っ込んでは、後ろから腰をガツツリ掴みながらガンガン種付けピストンをしまくった。

「それではのう…ここは猛々しい牛の如く…そちにはケダモノのように種付けしてやろうかのおく？ホレ、ホレ、ホレッ！」

「んんつ？ろ、老師、今なんと…種付け！？」

「おお、言い忘れてたが、妊娠だけは確実に

「ああ、凄いもうう、しゅごいもおおう！！」

「ムハハハツ、最高じやよ♪ミカヤ、お主は最高の『腹廻』じやああツ！ムハハハツ！！」

パン、パン、パンツ

パン、パン、パンツ

肉がぶつかり合う乾いた音が道場に響く。

「ああ、あん、あんツ…ああ、このままでは」「ほほ、おお、コレコレ、そんなに早く歩くではない。このままではせつかくの精剣が抜けてしまうぞい…ホレッ、ズブツズブンツ」

抜ける寸での所で、レイ老師の長い長い肉棒が膣から抜け出る直前での再挿入。

それをしばらく繰り返し、道場内を練り歩いた頃。ようやく老師はミカヤの脚を床に下ろすと、純粋な後背位の体勢…四十八手『鷦越え』である。その体勢から激しく腰を動かし、修練中の乙女のマンコにチンコを強引に突っ込んでは、後ろから腰をガツツリ掴みながらガンガン種付けピストンをしまくった。

「それではのう…ここは猛々しい牛の如く…そちにはケダモノのように種付けしてやろうかのおく？ホレ、ホレ、ホレッ！」

「んんつ？ろ、老師、今なんと…種付け！？」

「おお、言い忘れてたが、妊娠だけは確実に



してもらいうからのおく。安心せい、一発で妊娠させてやるからのお・・ホレッ！』

ズパンツと強烈な突きに言葉を飲むミカヤ。

その後も続く連突に

パンパンパンパンパンツ・・

パンパンパンパンパンパンパンツ！

『今回の『居合道』極意の伝授・・これは文字通り御主の身に『授ける』のじや。極意と共にその証明となる御靈をお・・それに『異愛』の極意はただ挿入させてドドスコスコするだけではない。その先には必ず終幕の射精が待つておる。じやから・・やるからには妊娠だけは確実にして貰うがのおくホツホツホ

頭の中が真っ白になるような感触。まるで走馬灯を見ているように、情景が頭に浮かぶ。

レイ老師は先程まで鮮血を伴いながら散らされた花びらを優しく労わりつつも、緩急のあるその力強いピストン運動で私を破瓜の痛みから完全に快楽の虜へと解き放ってくれた。

「ホホホ、ただ、鍛えているだけではなく、付く所にはそのまま女の肉に相応しいぶりんぶりんの胸と尻、抱き締めれば薄つすらと脂肪を残して弾力のある引き締まつた筋肉が武術家としての肉体としても申し分の無い良い

『子宿』となってくれるじやろうて・・

心なしか期待していたものの、それでもまだどこかで心の準備が出来ていない。

踏ん切りのつかない迷い多き乱れた心で臨んだ手合せに、勝利の可能性などあろうはずも無く・・失意の中、あまりにも突然に訪れた『憧れていた老人との交配』という非日常。

乙女から女となつたと強く自覚させられる電気のような快感と破瓜の痛みだけが、この非日常を現実のモノなのだと実感させられる。・・そのしなやかに収縮する膣の動き。

淫我応報とはまさにこの事か・・

「おおうつ、も、もうちょいでイクぞ、ミカヤよ！・・ああ、お主の中にワシの黄金の子種を振り撒いてやろうぞッ！・・くあああツ」

パンパンパン、パンパンパンパンツ

「んああうつ、はあ、構いませんツ、出してくださいツツ！・・イク、イク、いくうううツ」

（ほほう）にしても一発目からスッゲエ量の精を出してしまったのお・・ふくむ、じやが本

來ならワシの腰突き、とりわけ最後の射精によるワシの『男汁力』に耐え切れず、子宮が

押されて悲鳴をあげるか剣を鞘に收めきられず、精液を吹き散らしながら体が宙を舞うか

のどちらかという所じやが・・ミカヤ嬢ちゃんはまだまだワシの子種をその身に受け止められる様子。まあ、このワシの射精に耐えら

収める事だという。

老師の剣は確かに一瞬、私の中から抜き放たれたはずだつた。だが、それは私がまばたきをする間に再び奥深くに收められ、武術界の至宝とも呼ばれる老師の遺伝子を・・黄金の種子を私の子宮奥深くへと又き放つていた。

「どびゅつ、びゅるびゅるつ・・

「ハアハアハア・・はあつ・・あああはあんん・・ツ、ああ、じゅ、受精します・・ああ

「んんうむう、このワシに本気の射精を出させたのは死んだバアさんと・・そしてお主が二人目じやよ。お主はワシに抱かれる資格がある。光栄に思うが良いぞミカヤよツ」

「は、はい・・ありがとうございます・・老師」

（ほほう）にしても一発目からスッゲエ量の精を出してしまったのお・・ふくむ、じやが本

來ならワシの腰突き、とりわけ最後の射精によるワシの『男汁力』に耐え切れず、子宮が

押されて悲鳴をあげるか剣を鞘に收めきられず、精液を吹き散らしながら体が宙を舞うか

のどちらかという所じやが・・ミカヤ嬢ちゃんはまだまだワシの子種をその身に受け止められる様子。まあ、このワシの射精に耐えら

れる時点で花嫁としてはほぼ合格じやな。やはり最初の見立て通り、よく出来とる・・





「ほおうほおう・滴る雨におぬしの壺が濡れておるようじやのおく。どれ、その味はいかがなものかの？ムホホツまさに甘露甘露♪乙女の咽かえるような芳醇な香りと味わいじやわい……これならまだやれそうじやの」秘所から湧き上がるムワツとした熱気と甘い香り。鍛え上げられた美しい肢体にその身を割り込ませながら、乙女というその神聖な身体と交われるという事を考えただけで、レイ老師の体温は上がり、当に枯れたと思われていた師の下半身にも熱き猛りが戻り始めた。

もう……あれからこの新しい剣の教え子と十回以上はしたかの？しかし、たいしたものじや。この老骨の激しい腰攻めにも屈せず……まだ自分から腰を振つてきよる。

ワシはその後も、出しても出しても衰える事を知らぬ自身の肉棒を、ミカヤ嬢ちゃんの性器に何度も何度も叩きつけてやつた。

じゅぶんっ！パン、パン、パンツ……

「あつ・ふあツ、あ、ああ・はああん……」にゅふくじゅぶんツ、にゅふくじゅぶんツ「あつ・あツ、ああツ・フフツ・ああツ」じゅぶ、じゅぶ、じゅぶツ・ジュブンツ「フフツ・氣持ちいですか老師？ああん……」ああ、はああ、やああ・んんツ、ンツ

かがなものかの？ムホホツまさに甘露甘露♪乙女の咽かえるような芳醇な香りと味わいじやわい……これならまだやれそうじやの」秘所から湧き上がるムワツとした熱気と甘い香り。鍛え上げられた美しい肢体にその身を割り込ませながら、乙女というその神聖な身体と交われるという事を考えただけで、レイ老師の体温は上がり、当に枯れたと思われていた師の下半身にも熱き猛りが戻り始めた。

もう……あれからこの新しい剣の教え子と十回以上はしたかの？しかし、たいしたものじや。この老骨の激しい腰攻めにも屈せず……まだ自分から腰を振つてきよる。

射精して尚、律動を持って上下に腰を動かし始めると……それに合わせてミカヤの膣内も収縮を繰り返し、まるでレイ老師の精をすべて膣内に搾り取ろうとするかのように、腰の上下運動を繰り返した。

「ああ・フフツ、もうおしまいですか老師？もつと、私のオマンコをいじめて下さいまし、ああ、もう我慢できません。私の子宮が、子宮があああう老師の……あなたの子種を欲しがつてゐるおうあああ、んああ、ああんツ」

それは熟練の娼婦のような圧倒感さえ漂う妖艶さを振りまいていた。色っぽく美しいその姿は、ただ一人の女性そのものであつた。天瞳流の剣士でも武道家でもなく、女としての歓びがミカヤの身体を満たしていた。

レイ老師が精をほとばしってから休む間もなく……ミカヤは悶えるように腰を振り続けた。彼女は誰に教わるわけでもなく……いつまでも、いつまでも永遠に精をねだつた。

「はつ、はつ、はあつ、はつ、はあん」

出してえく、もつといっぱいオマンコに出してえく……ああ、ああ、あああああんツツ！！」「ひやあああツツ……ああん、ああ、ハアハア」ぐちゅ、ぐちゅ、ぐちゅ……

「んつ、んふう……はあああ、あん、あん、いやあああん……はあ……だめ、バカに、馬鹿になつちやううう、はあ、くうううつああああ、ダメダメダメえええツ！！ちんぽ、太すぎますうく……ろ、老師いいひやああツ」

上擦る声にも拍車がかかつてくる。

鍛えられた肉体は躍動感に富み、びくんびくんと爪先が跳ね飛ぶたびに、膣も収縮する。ミカヤの体は既に……乙女とはいえないような淫らであさましい姿態を晒していた。

激しい行為にあえぎ声をひつきりなしに發し、何度も精をねだりながら身体の感じる箇所を隅々までもまさぐられて……恍惚とした表情さえも見せている。

「ホホホ、まるでルーフエン武林の全てを飲み干さん勢いじやのお……この貪欲なまでの吸収力、このワシの力すら見透かし解剖・取り込もうとも言うのかのう……この老いぼれの精力ではいずれカラツカラに枯れはてるまで感じるのは……なんとも素晴らしい才覚に恵まれた嬢ちゃんじや、おつかないのおう」そんなミカヤも次第に声が途切れ途切れになっていく。頂点に近づいている証拠だ。そして、レイ老師のモノも本日何度も目かになる

射精に向けてひつきりなしに震えだしてい
る。絶頂へと向かう為の最後の振動だ。

「あつ、あつ、あつ、ああああああつ……うく
つ……ああ、はあつ、はあああ……いやああ、

いやあああ！！！ハア……ハア……ハア……

女武将との濃厚な天下統一セックス。

切なそうに腰を掴まれながら騎乗位で中出
しされる事を期待しながら、蕩けきった表情
で腰を激しく前後させ、ヘビの如く絡みあう
激しいセックスを見せるミカヤ。

「ちんぽつハア、ちんぽお、ハアハア……
ちんぽ、ちんぽ、ちんぽおちんぽ無しじや
生きていけない……ツああ、あつ、やあツ」

「ホホホ、綺麗なおっぱいじやのお。まる
で純白の大福もちのようじやなあ♪」

ぱよん、ぱよんと目の前を跳ねるミカヤの
胸はまさしくむしやぶりつきたくなる様な
つきたての餅そのものであった。

白くまるみをおびたその形に……男は本能
的に吸い寄せられるのであるうか？

それは達人とて例外ではなかつた。

「はああああ……ああ、出してツ、中に出して
くださいい老師いいいいツ！！あんツツ」

「さあ、受胎せえい……ミカヤよ」

「いつ、く……らめえ、中出汁しちゃうううツ、

あツ、ああ！！いつ……くう……イクツ、あツ
ああ！！はあああああん！！」

「くつ、うつ、うおおおおつっ！！」

ミカヤの身体はビクン、ビクンっと脊髄反

射するかのように仰け反りながら跳ね上がる。

ワシもあらん限りに咆哮を発しつつ、膣奥
の肉壁を突き破らんばかりに突き上げた。

ぱん、ぱん、ぱん、ぱんツ

パンツ、パンツ、パンツ、パンツ、パンツ……
(ここだ、この瞬間に『居合』があるツ)

絶え間なく腰がぶつかり合う乾いた音が、

夕暮れの道場に響き渡る。

「あつ、あつ、あつ、ああああああああつ！」

絶頂の瞬間……ミカヤの脳裏には、柔らかい
春の陽射しの中に舞い散る……桜の花びらを
幻視する。これが、これこそが『居合』の真
髄なのだと……煌きの中に散る桜の如く。

先に絶頂へと上り詰めたミカヤが、痙攣し

ながらビクビクと震えている。

その身体の微振動を利用し、膣内もビク、
ビクンツ！と小刻みに震え続けるたびに、膣
口が締まりレイ老師に最後の快感を与えた。
ドクドクドクツ……ドピュ、ドピュルウウ！！

蕩けきった乙女の妙技によつて、耐えられ
なくなつた達人の肉棒が大量の精を吹き出し

た。今回は引き抜く余裕さえなく、白濁した
液体を彼女の子宮口へと注ぎ込んでいく。

「はあああ……はあ……はあ……」

ブルンツ！！

膣内に満たされた精液のヌメリを使い……
肉棒がブルンツと勢いよく引き抜かれる。

引き抜いてからも撒き散らされる精液が、
木漏れ日に照らされる道場の中に舞い散る、
『純白の羽』のように輝きながら……桜色に染
まるミカヤの身体にふりかけられた。

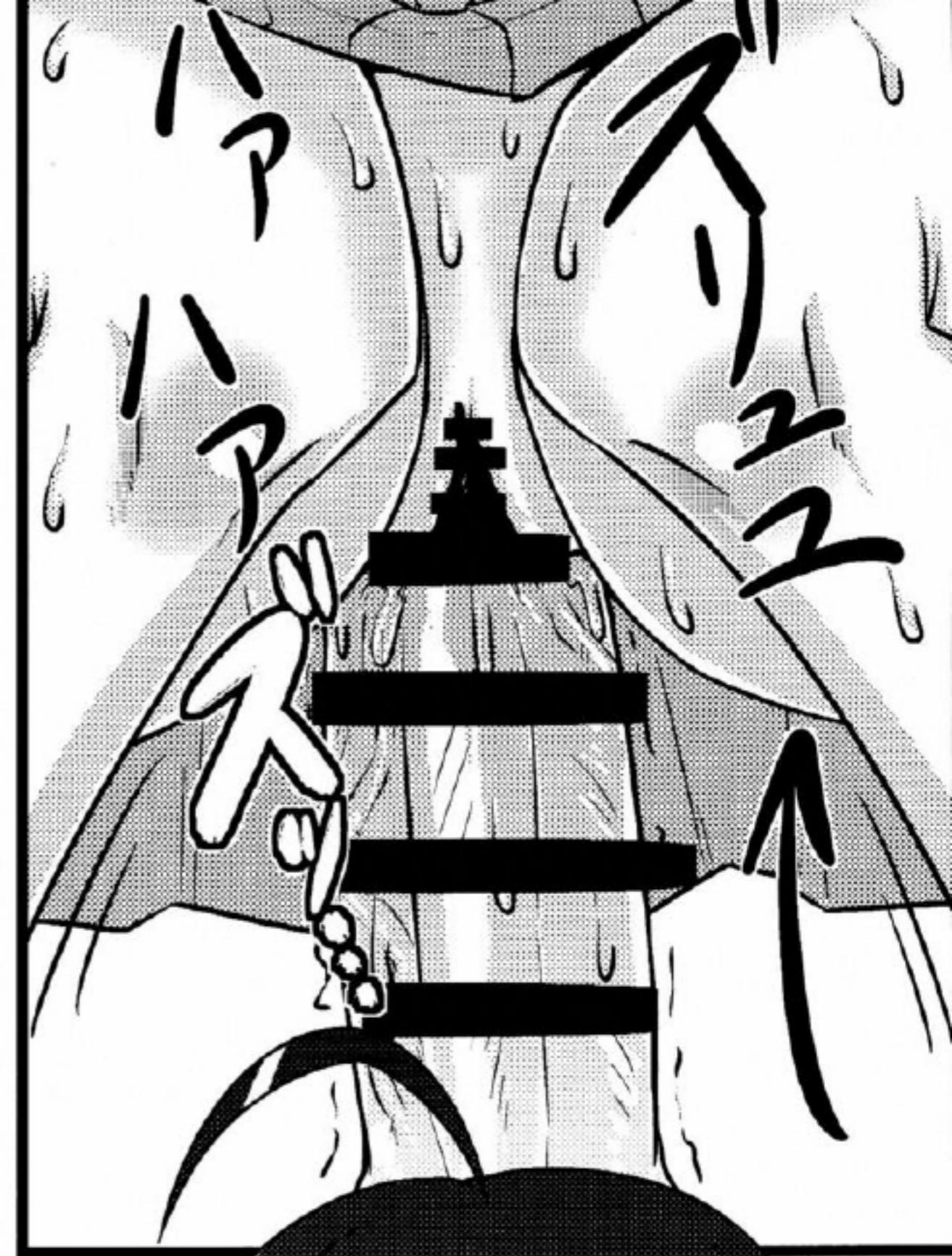
神聖な精液をその身に受けると、ミカヤは
深い吐息をこぼして力尽きた。

何度もわたつて緋色の袴とミカヤの上気
した薄桃色の肌を精液で汚し、体内へと精液
を注ぐ事でようやく快感は去つて言つた。

脱力し、身体を折り曲げながら跨つたレイ
老師の上にうずくまるよう身を任せせるミカ
ヤは静かに瞳を閉じた。

ふうう……ワシも数十年ぶりの性交に疲れ
たのか、ミカヤの安らかなその表情を見つめ
てから虚ろに天井を見上げると静かに疲れた
体を床に預け、その身をぐつたりと横たえた。
「ふう、やれやれ……ワシもまだまだ修行が足
らんのお。このようなうら若きお嬢ちゃん
に搾りつくされそうになつてしまふとはの」







れろれろれろお

私はもつとコレが欲しい：

欲しいのに…どうしたら老師はもつと私でエレクチオンしてくれるだろうか？

んうだがしかし、何故だ…どうしてこんな

にも口の鞘を駆使してむしやぶりついている

というのに…先程のように老師のモノはエ

レクチオンしてくれないのだろうかッ？やは

り、ただしやぶつているだけではダメという

ことか…では、コレならどうだろうか…？

「これはミカヤや…己の胸と黒髪を鞘に見

立てるとはじつに良い工夫じやの…ほほお

（おつと…ミカヤ嬢ちゃんの突然の不意打

ち行為に、思わずワシも驚き精をほとばしり

そうになつてしもうたわい…）

徐々にその硬さを取り戻しつつある肉棒を

髪でシゴキながら見つめるミカヤの熱い眼差

しと情熱に根負けしたレイは、再びそそり立

つ男根をミカヤの眼前へとさらした。

レイの股間からずつしりと生えたその肉棒

が…ミカヤの黒髪と胸に挟まれ、収まりきら

ぬ先端がミカヤの口の中へと消えていく。

髪でシゴキつつ咽の奥まで肉棒を咥え込み、

レイ老師の股間に顔をうずめるミカヤは…：

徐々に猛々しく頭を上下させ、新たなる『居

合』をその身に刻みながら奉仕を続ける。

「せ、先生の逞しい剣は…この私の全身、髪の一本一本に至るまでそのすべてを捧げてお

沈め致します…はあむ、はあ…んんっああ

（黒く、硬く、そして太い…こんな黒々とし

たモノが私の中に入っていたというのか？）

はあむつ…じゅりゅ、じゅちゅッ…：

シユルシユルシユルツ、シユルツ、シユル。

次第にミカヤの肉棒をシゴく手の動きが激しさを増していく。男根に巻きつけられた束

ねられた前髪がヌチョヌチョと激しく前後に

動き、その乱れた髪と情欲におぼれる瞳が…

ワシの男根をさらにたくましくさせていく。

「んうふはあ…ああ、んふふ、先生の精剣は

留まる所を知りませぬな…こんなに出して

いただいたというのに、まだその猛々しさは

ご健在と見える…はあむ、つんん、ペロッ

ペロッペロッ…じゅるツじゅるるるう…」

（ホホ、女性が男性器を咥えたくなるのは『女

性の本能』などと昔、師匠が言つておつた

が…頬を赤く染めた孫ほどのおなこが、たま

らなくなつて愛しいおチンポを求めて無性に

しゃぶりついてくる光景は…いくつになつ

てもこれほど興奮するものとはのお……）

「はあむ…はあう、ああむ…んんんん

んツツじゅふじゅふじゅるじゅるじゅるツ

（によわあく気持ちイイのお…口の粘膜と

竿を覆う艶やかな黒髪の感触がワシのアソコ

をビンビンに刺激するようじやの…ウウム）

それにしても…ここに来て初めて出会つたお嬢ちゃんに『口』という器官の本来の使い方ではない方法で、じゅるじゅると精を搾り出されそうになるとは思いも寄らんかった。

：んん、はあむつ、じゅるじゅる…：

「ああんツ、んつ、んつ、んツ！」

熱を帯びた僕の肉棒を再び根元まで深々と

咥えこみ、ミカヤはただひたすら…いとおし

そうに肉棒にむしやぶりついていた。

んつ、んつぱ、んぱんつぽ…：

はあ、ちゅうちゅぱツ、ちゅぱツ…：

「ほほ…スゴイのお…ミカヤや…そんあに

もワシの肉棒が気に入つたのかの？」

（ホホ、女性が男性器を咥えたくなるのは『女

性の本能』などと昔、師匠が言つておつた

が…頬を赤く染めた孫ほどのおなこが、たま

らなくなつて愛しいおチンポを求めて無性に

しゃぶりついてくる光景は…いくつになつ

てもこれほど興奮するものとはのお……）

「はあむ…はあう、ああむ…んんんん

んツツじゅふじゅふじゅるじゅるじゅるツ

（によわあく気持ちイイのお…口の粘膜と

竿を覆う艶やかな黒髪の感触がワシのアソコ

をビンビンに刺激するようじやの…ウウム）

ジユプツ、ジユプツ…：



じゅるツじゅるツじゅるツ

唾液を絡ませながらレイ老師の肉棒をすす

り上げるようにしゃぶるミカヤ。

さらに自身の豊満なおっぱいを唾液でヌルヌルになつた肉棒へ挟み込むと、胸の谷間から顔を覗かせる亀頭の先端部分をちゅぱちゅぱと吸い上げていく。

そして…くるおしく、愛しく、激しく、胸で肉棒を上下にしげきながら射精に向けての奉仕をおこなつた。

ぷるん、ぷるん、ぷるん♪

たゆん、たゆん、たゆん♪

が：まるで水風船のように形を変えながら時にチンポに纏わりつき、時に激しく上下にたゆんだゆんと跳ねた。

んっぽんっぽ…ちゅうちゅぱツちゅう
胸の谷間から時折這い出す亀頭の先端部分を舌で愛撫し、それをまた胸の谷間の奥深くへと引きずり込んでいく。

大幅に射幸心をそそるその光景にまた勃起してしまつた。

「ぬおおこの乳、もといこの鞘はたまらんのもうよくぞここまで大きく育つたものじや。ワシのこの名刀を納めるに相応しい鞘じやミ

カヤよ♪フンツ、フンツ、フンツッ！」

「うあんっ、ああ、そ、そう言つていただけで光榮です老師…ルーフエン行きが決まつたあの日から、この瞬間が来る事を何度、夢に見た事か…あんツ、アアンツはあ！！」

ジユルルルル…

ジユポジユポジユルルルル…

「ほほあああおお、気持ち良いぞミカヤや。

このまま最後まで吸い出せいいツ！！」

んんうくんんくチユジユルルウウ！

ピチャ、ピチャ…じゅるるるるるつつつ

「うあああ、出るツ…イ、イキますツ、あつ

どぴゅつどぴゅつドピュツ！！

まだまだ睾丸に残る卵白のようにネットリとした濃厚な精液を…ミカヤはじゅるじゅると音を立てて飲み干していく。

天瞳流と出会つて十二年…抜刀居合に青春の全てを捧げてきた。そして、天瞳流師範を舌で愛撫し、それをまた胸の谷間の奥深くへと引きずり込んでいく。

大幅に射幸心をそそるその光景にまた勃起してしまつた。

期待と不安入り混じる緊張の中、「達人」と呼ばれたお方と初めて対面すると…それは自分の3倍もの月日と鍛錬を重ねた重みと悟りを会得した心の余裕からくる物腰の柔らか

そうな老人というより大人の男性。

私はこの御仁を初めから異性として激しく意識したのを覚えている。

剣の修行と称して芽生えたこの劣情じみた

もあつた。ルーフエンの書庫での書物を見つけるまでは…それは秘蔵の指南書として、本棚の奥深くにしまわれていたその本は、身体の剣を使用した四十八もの剣技が記載された指南書だった。中には目を疑うような体位の技を数多く紹介されていたが、それを読むにつれさらに疼きを増す自身の女を止める術を未熟な私は持ち合わせてはいなかつた。

昂ぶつた肉欲を沈めるために延びる指先に触れるヌチュリとした愛液のヌメリ。書庫ではいけないと分かつていても止める事の出来ぬ指の動きと下着からあふれ出す愛液が絶頂に達するたびに吹き上がり…座する木彫りの椅子へ大きなシミを刻み込んでいった。

大義名分で虚飾された肉欲の前には、倫理や常識など介在する余地は無かつた。

まだ男を受け入れたことの無い自身のつぼみを指で散らすまいとゆつくりゆつくり解きほぐしながらクチュクチュと壺の中に指を入れてかき回していく。



だが、そんな小刀のような女の細指とは比べ物にならないほど太く、長く、そして硬い。折れず曲がらずの太刀の如くそそり立つでも、私の中を縦横無尽に突き続けた。

「ミカヤ嬢ちゃんは『壺中天』ということわざを知つておるかの？ 読んで字の如く、壺の中はまさに天にいるかの如き心地よいさまであるという……このルーフェンに古くから伝わる古事なのじやが……今のこの状態こそまさしく『壺中天』の言葉に相応しい。お主の身体……膣・口・胸・尻・腋・膝裏・髪、それぞれの各『肉壺』の中はまさに……天にも昇る心地よき場所であつたぞ♪」

「この鉄を鍛えに鍛えた業物こそルーフェン武林の至宝三種の神器の一つ精劍たる男根。

そして、未來ある黄金の種子を携えし玉宝たる睾丸。最後にその宝を受け止める清く澄みきつた鏡のような膣。男女合わさりて初めて、ルーフェン史に語り継がれる『未來永劫の繁栄を約束されし至宝』となる。そちはこれからもそれに耐えられるかのおミカヤよ？」

「はい、この身が尽き果てようとも……武道の魂をこの身に宿し、きっと元気な赤ちゃんを産んでみせます。今後も末永く『自愛下さい』

「ね、ねえ、もう止めようヨリンナ姉え！！ ミカヤさん何時間もずっとじーちゃんに犯されて……このままじや、ミカヤさんおかしくなつちやうよッ！？ ねえ、ってばあく！！」

「ちょツダ、ダメだつてリオ！？ ジーちゃんに言われただろッ！？ 何があつても合図があ

るまでは道場の中に入つてきたらダメだつて……それにほら、よく見てみなよお……あのミカヤ先生のとろけた顔。もう高みに昇る事

しか考えられないつて女の顔してよお……ゴクツうわああ、すごい……あんなにズッポン入っちゃつてるよお……うわあくすごい」

道場の隅にある小窓から中の様子を見つめるリンナとリオは、とくに年頃のリンナは目をランランとさせながら……二人の情事に思わず生唾を飲み込むのであつた。

「……えつと、どうしようアタシ……これからミカヤさんの事『おばあちゃん』って呼ばないといけないのかなあ？ なんかヤダなあ」

けたかと思つたら、目の前に桜の花びらが広がつたような感覚がして……気が付いたらもう納刀が済んでる。こりや、切られた事にも気が付かず、華に抱かれて心まで昇華して気持ちよく切られてるつて感じだなあ……こんな凄い技いつ覚えたんだよ？」

ノーヴェは一瞬の出来事に少々戸惑いながらも、ミカヤとの手合せで乱れた衣服の身づくろいを整える。

「フフフツ、これがルーフェンでの修行で私が老師から伝授された『異愛』の真髓だよ。もしよろしければナカジマちゃんも会得してみるかい？ 私でよければ相手になるよ」

「いやあ、なんか怖え、からまたの機会で」

これでまた一つ、ルーフェンの新しい枝葉が広がりを見せ……新たな武道との『異愛』となつて、次の世代へと物語りは受け継がれ進化していく事になるだろう。

(おわり)

時は戻り……拔刀居合天瞳流 練武場――

「天瞳流抜刀居合・天月・桜花——オウカ——」

「ぶわああ、シャキシャキシャキーン！！

……キンツー

「おお、なんか凄いなミカヤちゃん……剣が抜



の著者様お二人のソウルとが、魔法少女での和風感は若干ズレているのが似ているのではないか？と考えた所から始まり…さらには

奥付

あとがき

ドーカ、初めまして。お久しぶりです皆

さん…ロボ萌えです♪チュドーン！！

この度は『壺中天～ちゅうてん～』をお

手に取っていただき、まことにありがとうございました御

座いますぐ！ドンドン、パフパフ♪

ここ最近は、リリカルなのはvividア

ニメ化記念としてvivid本を出させてい

ただいている我がサークルですが…今回は

黒髪おっぱい剣士の『ミカヤさん本』を発行

させていただきました♪

今回は、ミカヤさんの中の人もエロゲーボ

イスでエロシーンがイメージしやすく、ノリ

ノリで書けた気がします♪ムフフフツ♪

さて、そんな本作でしたが…今回のネタは

非常に感銘を受けた「ニンジャス○イヤー」

調の文章テイストでお送りさせていただきま

したが、皆さんいかがだつたでしょうか？

このロボ萌え、実はメカメイドに萌える以

前は『日本刀』『巫女』というワードに激しく

萌える存在としてw中学時代は「るる剣」の

薰殿と巴殿で、ご飯が3杯食べれるほどの和

装好きでありましたw

その感覺と海外から見た日本觀である忍殺

の著者様お二人のソウルとが、魔法少女での和風感は若干ズレているのが似ているのではないか？と考えた所から始まり…さらには

『壺中天～ちゅうてん～』

発行・ロボ萌え研究所

著者・ロボ萌え研究所

表紙イラスト・スガレオン

挿絵イラスト・スガレオン

御劍

狂歌

発行日：2016年8月14日

印刷：株式会社

HP：ロボ萌え研究所

<http://robomoe.ukkari.us/homepage/index.html>

ツイッター・ピクシブもやっています。

詳しく述べHPからお願い致します。

この場を借りて、改めて御礼申し上げたい

と思います。

● 本書は十八歳未満の購入・閲覧を

お断りしております。

● 本書の内容はあらゆる犯罪行為を肯定する物ではありません。本書に記されて

いる内容を実行した場合、犯罪行為となる恐れがあります。

● 本文又はイラストの無断複製・転載を

禁じます。

またお会いしましよう

